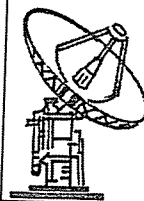


特集「情報化社会と宗教」

Feature: The Information Society and Religion



対談

情報化社会の文化と宗教

村上陽一郎＋佐藤 進

情報化社会とは

佐藤 あらためて、情報化社会とは何か、と聞かれると、私にも厳密にはよく分らないところがありますが、まあ、簡単に言えば、情報を売って儲ける社会、ということになりますかね。たとえば、ニューメディアで唯一期待されているVAN(Value Added Network＝付加価値通信網)というのがありますね。これは情報の交換、伝達、



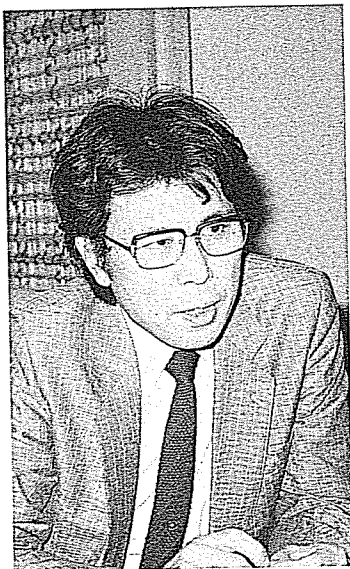
佐藤 進氏

処理などを行うもので、一兆円市場になると言われている。また、私は二年ほど前に学生の就職斡旋の仕事をしていたことがあるんですが、新日鉄や住友金属などの鉄鋼会社でもセメント会社でも、どこでもインテリジェント(情報)ビルを作る、という話ばかりでした。つまり、このビルの中で企業がVANを利用して販売戦略や在庫管理などの情報処理を行う、ということなのでしょう。また、新日鉄では四千人位、システム・エンジニアを抱えているそうですね。彼らが本場に情報産業に参入する時のことを考えたり、さまざまな情報システム会社があることを思うと、一体、情報産業はどれほどの市場になるのか、ちょっと分からないですね。

現在、私は工学部に籍を置いているのですが、学生たちは前はメーカーにしか就職しなかったのが、最近では、三分の一ぐらいは商社、銀行、証券会社などに行くんです。このような会社には人気が集まるというのも、いわば情報化社会の一つの兆候を表していると言ってよいでしょうね。おそらく日本の外債を買い、アメリカの外債を買って、これらを組み合わせてコンピュータでいろいろ

ろシミュレーション(模擬)を行う、というような仕事をするわけですが、私は学生たちに「そのような仕事を続けていって、三十五歳から四十歳頃にそれなりのスペシャリストになってしまうと、後は使いものにならなくなるぞ」と言っているんですよ。つまり、ハードを知らずにソフトだけでやっていけるのかな、という疑問を持っておりまして、彼らに両方やらないとあぶないぞ、と指導しているんですがね。

結局、情報化社会というのは、情報を処理したり交換したりして儲ける、ということが主流になるような社会、と一応、言うことができますかね。しかし同時に、もう



村上陽一郎氏

一方では、本当にそのような社会が成り立ち得るのかな、との思いもあります。

村上 これはむしろ佐藤先生にお話いただいた方がいいのかもしれないですが、情報という概念が少なくともさまざまなコンテキスト(文脈)で論じられるようになるのは、やはり第二次世界大戦以後からですね。もっとも戦前にも「情報将校」なんていう言葉があつて、それも情報の重要な局面の一つであつたのでしようし、スパイというのはまさに今言われた「インテリジェンス」の話ですから、そういう意味では情報化社会の兆しというのは軍事にあるのかもしれないですね。で、戦後、情報概念が情報理論やサイバネティックス(自動制御等の統一処理理論)などで議論されるようになる背景も、やはり基本的に軍事そのものであつたわけですから、軍事の影響がちらちらしているのですが、ともかく、情報概念が独立に学問の世界で論じられるようになったのは、シャノンやウィーナーなどから始まるわけです。

しかし、この段階では、まだまだ通信理論にすぎなかつた、と言つてよい。つまり、情報を伝えるための担

手は何らかの形で「もの」としていつでも存在していたわけです。ワイヤーであれ、電波であれ、何らかの実体があつた。ところが、この段階で議論している限り、情報というのは「量」としてしか定義できないために、エントロピーなどの熱力学から借りてきた概念を使って、量的な形でのみ捉えられるところだけを情報として取り上げてきたわけです。

現在、情報化社会と言われているのは、佐藤先生が言われたように、ハードは何であつても構わない、というか、ハードに対する関心が背景に退いてしまつて、いわば「もの」の裏付けなしに、情報と呼ばれるものが、人間の行動を刺激したり、束縛したり、コントロールする、といったようなことが社会の非常に大きな特徴として見えてきている。

もちろん、古くからあらゆる人間社会は情報抜きには生きてこれなかつたわけですが、極端な話、たとえば株価、外国為替レートの価格、あるいは金相場の値段などもそうかもしれませんが、本来は金という実体が背後にあつて初めて成り立つ相場であるにもかかわらず、現

在は情報だけで値段が決まつていて、しかもそれによつて現実にお金動いたり、人間が、社会が動いたりするわけですから、多分、情報化社会というのは、象を撫でる譬えのように、どのようにも捉えられるものかもしれないが、一つの捉えかたとして、「もの」や実体のある何かによつてではなくて、情報と称するものによつて動くような社会といえるのではないのでしょうか。

佐藤 これはあまり勉強していませんのでお伺いしたいのですが、廣松さんが実体概念より関係概念の方を重視しているでしょう。たとえば、素粒子を例にとると、場を分けて局所場にする、真空とは局所場の励起状態における基底状態である、と。そして、その基底状態をいろいろ変えると物質になるから、したがつて、物質というのも、単なる、局所場の励起状態にすぎない、と……。まあ、そのように現在の素粒子を理解すれば関係概念とは言えないことはありませんが、それが実は実体であるとも言えるのですね。

だが、廣松さんは関係概念を実体概念より重要視して、関係概念が全てを律する、とし、さらに情報と言うもの



対談中の両氏

も関係概念に根拠を置いて捉える結果、物質は実存在せず、関係概念としての情報だけが存在している、ということになってしまいうのですが、この点、先生はどうお考えですか。

もの・こと・情報

村上 私に廣松さんの代弁はできませんし(笑い)、また、私もそうあるべきであるという意味では必ずしもなくて申し上げるのですが、人間の関心が近代から現代に移るにしたがって「もの」より「こと」の方が——この「もの」「こと」について廣松さんと同じ意味で使えるかどうかは分かりませんが、私なりの意味で言いますと——主役を演ずる社会、と見ることによってよりもう少しものが見えると思われるような時代が来ている、というような言い方ができるのではないかと。

それは、つまり、人間の関心の赴く所、言い換えれば、どこに光をあてて物を見るかという時の見方が、「こと」の方へシフトしたというように言えないこともない、と私は思っているのですが……。たとえば、これは特殊な

話題みたいですが、二十世紀に入って発達したものに記号論理学があります。

たとえば「このバラは赤い」という場合の「このバラ」は主語ですね。我々は普通「このバラ」に注目して、そのバラがどんな性質をもっているか、という時に「赤い」という性質を持っているとか、「刺がある」という性質を持っているとか、「バラ科の植物である」などといういろいろな分析ができるわけです。

つまり、我々の通常の認識というのは、まず、「バラ」という「もの」をつかまえたなら、つかまえた「バラ」がこれこれしかじかであるというように考えていくとする。それが元来の考え方であり感じ方であったとすれば、記号論理学のいう述語論理では、大文字で書かれているのは述語であって、主語は変数になってしまっている。そこには何もない。

たとえば、先の例で言えば、まず「赤い」という述語があるということになる。さらに、「夫婦である」という関係を表す述語がある。その際、元来の考え方では、まず、主語としての、誰と誰というのがあって、その後

に、夫婦である、という関係を表す述語が来るんですが、述語論理では、ともかく「夫婦である」という関係が初めにあって、その関係の両端に見えてくるのが、美空ひばりや小林旭であったりすることはあっても、まずは夫婦である、という関係から出発しましょう、というのが論理学でも非常に明快に出てきているというように言えないこともないんです。これはやはり、新しい認識の切り口というか関心の光の当て方について、二十世紀に入

って現れてきたものです。

さらに、昔の論理学では、S(主語)+P(述語)の形式で、「すべてのカラスは黒い」とか「あるカラスは黒い」とかというように、「カラス」という主語がまずあって、「黒い」という述語があって、この主語と述語とがどのような結合するか、という議論をしたわけですが、二十世紀の論理学は「あるカラスは黒い」という命題がまずある。そして、この命題が認識された時に、世界との関係がどうなっているか、ということと議論が始まる。これもやはり「もの」から「こと」への視点のシフトである、と見てもよいと思います。

ただ、それで「もの」全部がなくなってしまうかと言えば、そうではない、と思うのですね。このあたり、多少とも誤解が生じているように思うのですが……。

「もの」と「こと」については、これぐらいにして、ただ、情報の場合はどうなのでしょう。

私が学生たちに出す例では、たとえば、二人の人間が道を歩いていて、後から車が来たけれども、それに気づかない、という場合。そこで、私が「あぶない」と叫ぶ。その時、私の声帯から出た音のエネルギーは音波、空気の圧力になってAさんとBさんの両方の耳に達して、鼓膜を震せながら耳の中のさまざまな生理器官が動き、ともかく物質的には刺激がパルスになって、パルスが脳のどこかに到達して……というように、物質現象としてはAさんとBさんともに同じことが起こっているにも関わらず、たとえば「あぶない」という日本語の分かるAさんはびっくりして飛びのくけれども、日本語の全く分からないBさんはゆうゆうと歩いていく、という事態が生ずる。

この場合、二人の人間の行動を支配しているのは何か

たとえば、音波の物質現象や神経生理学的な現象そのままではなくて、「あぶない」という日本語の担う何らかの意味が理解されているか否か、ということが決定的に二人の行為の差をもたらしているわけですね。

かりに、そう考えるとすると、そこにはもちろん、「あぶない」ということを認識する主体としての人間の物質的なシステムが必要であることは言うまでもないが、しかし、AとBとの行為の差をもたらしているのは、あるコンテキストの中で「あぶない」という意味がどう理解されるかが問題になる。これは一種の心身問題みたいなところがあるのですが、物質現象の方はこれこれしかじかで、しかし、理解するという心の現象はこちらに別にある、と言うような議論になりかねない恐れもあります。が、ともかく、情報というのは意味の理解というものを抜きにして、つまり情報の量だけをどうこうしても多分人間の問題に直接それほど関わってこないように思うのですがね。

佐藤 セルヴァン・シュレベールが著書『世界の挑戦』の中で、教育情報のネットワークを張り巡らせていけば、

イト・オブ・イグノランス」(無知の権利)というテーマで講演したことがある。そうしたら、ヨーロッパ人から猛烈にたたかれて「お前は民主主義の敵だ」と非難されたのです。

しかし、未だにその時のことが気になっていて、確かに「イグノランス」という言葉があまり良くなかったのかも知れません。おそらく今なら「情報を与えられない権利を留保する」とでも言うべきところであったのですが、まあ、そのようなことを、その時言いたかったのです。

そのように考えた理由の一つとして、たとえば、原発の問題があります。これはかなりデリケートなところをはらんでいます、あえて例として挙げてみましょう。

原発に関して、素人は原子力発電の内容についてよく分からないまま、なんとなく「やばい」と思っている人が多いわけです。しかし、専門家の方は「なんとなくやばい、では困る。どこがどうやばいかを指摘してくれないと専門家としては対応の仕様ががないではないか」と言いますね。素人の方は、それもその通りだというわけで、

第三世界の貧困の問題などは解決する、と言っておきますね。しかし、以前にもサルトルが「百万人の飢えた子供にとつて、いったい文学に何の意味があるか」との問いを発して、文学の有効性について問題提起したことがありました、まさにその通りであって、セルヴァン・シュレベールの言うような方法で、問題は解決するのかな、とも思うのですがね。

まあ、情報と教育とを一緒に論ずることができるかどうか、という問題もありますが、今、先生が出された例の、道を歩いている人に「あぶない」と呼びかけるというのも一つの情報であり、ある意味で教育とも言えるとして、果たしてそのようなことだけで、セルヴァン・シュレベールが言っているような意味で、あるいは『第三の波』のトフラーが言っているような意味で、第三世界の問題が解決されるのかな、という気もするのですがね。村上 ああ、なるほど。

先生からいきなり、情報化社会への安易な礼讃論に対するご批判が出ましたので、それに関連した話をしますと、今から十五年ぐらい前に、ある国際会議で、私が「ラ

「じゃ、もつと原子力発電の機構や理論などを勉強しよう」となる。それはそれでいいのですが、さて、勉強をしていきますと、だんだん専門家や玄人に近づいていくわけですね。

そうして、インフォメーション(知識)を与えられれば与えられるほど、いわば専門家が専門家の共同体の中で、ものを見、考え、理解しているのと同じパターンに吸い寄せられていくことになる。そうすると、素人が専門家の側に組み込まれてしまつて、専門家と同じ土俵に乗ることになり、逆に言えば、素人が専門家の土俵の中でしか問題を見られない、ということに近くなっているのではないか、と思うのです。

というのも、素人は素人なりに、専門家とは全く違う、別の感覚なり見方なりがあるはずであり、その表現も専門家の用語を使わずに専門家の土俵の外で論議された表現されたりしていいはずですね。また、そのような素人の表現が専門家からゼロとして査定されるということがおかしいわけでしてね。

まあ、そのような理由から、さきの講演を行ったので

す。

佐藤 僕は、原発の問題に関しては、一般に専門家と言われている人たちは本当に専門家と言えるのかな、という気がしているんですがね。たとえば、事前評価でラスムッセン報告(信頼性に対する一つの評価方法)などは手探りであれフォールト・ツリー(確率論的安全評価の手法)やイベント・ツリー(同)なんかやっていますよね。個々の事象なんかや確率なんかはつきりしていないでしょう。そこはいい加減にやっているんです。だからそこでは専門家ではないんですよ。

村上 ええ。だからなおさらそうなんです。ある専門家集団の中で採用されている手続きがあり、そして、これこれしかじかの手続きに従えば、これこれの形で安全であるとか安全でないとか、ということが専門家のパターンの中だけで論じられることになりますよね。今の基本的な姿というのは……。

佐藤 僕はむしろ本当の専門家になればいいと思うのですがね。原子力発電所の場合には、いわゆる専門家と言われる人ですら、いま言ったように、あるところでは、

全部いい加減にして素人のように振る舞ってすましてしまうところがある。だから、アメリカの原子力規制委員会がラスムッセン報告が怪しい、と言って、十分の一位に確率を下げなければいかん、ということになりますでしょう。それは当然ですよ。個々の事象の確率が分かっているのに、フォールト・ツリーでやつても意味がないわけですから……。そんなところから、私は専門家というものを信用しておりませんね。

村上 しかし、本当にあらゆる問題をきちんと考えられたら専門家とは言えないのではないか、と思うのですが、どうなのでしょう。

佐藤 たとえば、ある専門論文を見ますでしょう。リファレンスが載っていますね。そこに出てくる外国の参考文献を見ますと、大体、その論文の水準が分かりますね。たいていは、リファレンスに載っている文献の水準より後退していることが多い。だから専門家のレベルに近づくという意味が私にはあまりよく分からなくてね。

私の専門は振動工学ですが、これまで、いわゆる専門外の熱力学や流体力学などの研究者のミスを見つけてよ

くつるし上げたものです(笑い)。そうすると彼らは「佐藤は素人のくせにつるし上げた」と文句を言うんです。で、僕が「素人というのなら、僕の指摘したところについてきちんと説明してみろ、僕の方がよく知っているぞ」と反論するんですが(笑い)……。

私に言わせれば、専門家になるには簡単なんです。十ほど外国の論文や文献を読めば大体分かりますもの。しかし、量子力学なんかになると多少、難しいかもしれません。それは言葉が日常語で語られていますから、そういう意味で少し分かりにくいんですがね。

「専門家」の盲点

村上 では、もう一つ、例を挙げましょう。これは犬養道子さんが書かれていた話でもあるんですが。アフリカの飢餓の子供たちを救おうと、人工栄養のミルクを作り、これを大量に子供たちに提供したんですが、スキヤンダルが持ち上がった。

どういうわけか日本ではあまり報道されなかったのですが、要するにミルクを飲んだ子供たちの間に猛烈な消

化器系の伝染病がはやった。で、栄養学の専門家は栄養学の立場から見れば、人工栄養にビタミンや鉄……などを補給して立派な食物になっているので、これを食すれば飢餓は救われる、との結論を出していれば推進役になわっていたわけです。

だが、考えて見ると、素人でも分かるんだけれども、アフリカのように水がなかったり、清潔な水の得られない所で、哺乳瓶で栄養に富んだ人工ミルクを溶いてまともに洗わずに置いておいたらどういうことになるか——というようなことは、別に専門家でなくとも、素人でも健全な常識をもっている人であれば分かることなのですが、これを推進した機構の人達の動きの中では、このような考えがほとんど働かなかったんですね。

だから、さつき専門家と言ったのは、水準の問題ではなくて、その専門家共同体で一応、公認・共有されている手続きと物の見方とで見て行く限りにおいては、しかじかの結論が出てくるとしても、それが全体としての、もっと広い人間的なコンテキストの中で、より全体的な立場でそれが健全であるかどうかは分からないにもか

わらず、現代の社会においては、その専門家の流す情報というものが、その領域に関しては決定的な権威を持っているというように対して、私は「無知の権利」というものを主張しようとしたんです。

佐藤 だから、長期的な影響でないとか分らないものがありますね。それを短期的な実験で分かった、ような顔をして言うというのは、専門家の一種のたまじやないか、と思うわけですね。

たとえば、人類が千年、あるいは一万年かかって、食べられる「きのこ」と食べられない「毒きのこ」とを識別してきたのに、今のお話のように、短期的な実験で、しかも非常に限られたデータで結論を出してくるんですが、それは本当の専門家ではないんじゃないか、と思うんです。

私から言えば、本当は決定的なこととは言えない、と思うのですがね。

村上 ええ。だから、もちろん専門家に研究するな、とは言えないのですから、少なくとも研究したり発言する側は、言えないところがあるということを知っている

おいてほしい、ということですね。

佐藤 だから、科学の適用範囲と有効性をわきまえておる、ということが必要なんです。それをあたかも一種の権威で全て分かつている、というように言うことは不遜ではないか、と思うのですがね。

ここで思い出すのは、晩年のディラックの言葉ですね。つまり、現在の量子力学では、ブラックホールは巨大な重力場を形成するので、シュヴァルツシルト(ブラックホールの周囲で光も出てこれない範囲)半径内では、すべての物質は閉じ込められたままとなってしまうて、内部に関する理論的考察はよく分からない、だから「超量子力学」が必要である、と言っていますね。

また、現在の量子力学は非常に高エネルギーや短距離では常識的な解をもたない、つまり無限大の値に導く相互作用がでてくる、この無限大の項を人為的な繰り込み理論によって処理するのは良いとは思えないが、ハイゼンベルグの運動方程式は完璧なものと思えるから、簡単な変化ではこの状況を乗り超えられない、とはいえ、現在、徹底的な変革、量子力学からの大変動が、二十世紀

後半から二十一世紀初頭に胎動し始めている兆候が見られるので、現代物理学を完全に真なもの、変化しないものとして扱うことはできない、とディラックは死ぬ前に語っていますね。その辺からも、今の量子力学といえどもまだ相対的なものですね。そのような見方をすればどのように考えることができる、ということにすぎない。

トーマス・クーンが言うように今の時代の文化圏の中で、かつ皆がある範囲内で承認しているだけの話なんです。すね。

たとえば、素粒子の考え方で様々な考え方が出てきますね。例のガモフが出したビッグバンセオリーも、真空が相転移して発熱して爆発した、というものですが、最近では、宇宙は密度が一立方センチメートルあたりの真空がビッグバンによって膨張し、そして幾度かの相転移を起こして膨張し続けてきたのではないかと、言っていますし、また、今でも、真空ができて、電波望遠鏡で見たら、正の宇宙と負の宇宙とが衝突して光になっているところが観測されているでしょう。

さらに、ビッグバンというのは一つとは限らないとい

う話がありますね。だから、要するにみな一種の仮説の段階ですわね。したがって、常に全部相対化している、と言うことですかね。そうすると、専門家というのはどういうことになるんですかね。

村上 もう少し大きな文化的なコンテキストの中で見ると、意味を含めた情報という概念が社会の中で飛び交っているんですが、明らかに言えることは、あらゆるものを平等に情報化しているわけではないわけですね。特定のところが情報化されて社会の共通財産になったり、あるいは個人の財産になったりしているわけですが、そうすると、そのような偏りというものが本質的に存在しているということをお認めないと、今度は新しい仕事もたぶんできない、と思いますしね。

佐藤 さきほど、先生の言われた「無知の権利」ですが、僕もそれを最大限に使わせてもらっています。ダイレクトメールなんて、全部読んでいたら時間がありませんからね。

INS(高度情報通信システム)が中心となって登場したキャプテンシステムがありますが、あれは御存知のよう

に、テレビと電話線を結んでキャブテンセンターから、航空機の座席の予約や商品の注文などの利用者の要求に応じた情報を提供するニューメディアです。これなど、装置に六〜七万円かかるうえ、三分三十円の料金を取られるんですね。で、情報の欲しい時にはキーをたたくことで逐次に出てくるんですが、情報がいくつかになった時には、画像を一々切り換えねばならないし、前の情報を忘れてしまう、ということもあり、料金もたちまち数百円のオーダーになってしまう。

まだダイレクトメールの入っている新聞の折り込みの方がちよつとトイレで見ることができるといふ移動性があるし(笑い)、一覧性がありますね。それでも捨ててしまふわけですから、その意味ではキャブテンシステムというのはやはり情報社会の過程にはあまり入ってこないの違いますか。

村上 一時期は非常な普及率を示すという触れ込みでやってたみたいですがね。

七、八年前、デルファイ法(世論調査法の一つ)のアンケートで、水洗便器にセンサーが付いていて、用を足した時

に、その内容をたちまち分析して、潜血反応があるとか、糖分が多いとか、といった何か異常があると、センサーがクリニックや病院に直結していて、直ちにクリニックや病院から呼出しがある、というような便器が日本の人口の何一〇%かまでに普及するのは三年先か五年先か八年先か、というようなアンケートがあつて驚いたことがあるんですね。

これなどは、普及することを前提にした設問なのですが、佐藤先生が最初におっしゃった、まさに、情報を商売にしていふ、ということですね。

ただ、真面目に考えて、一人暮らしの老人の水洗便器に何らかの装置を付けておいて、たとえば朝何時までに、一度もフラッシュされなかったら、誰かが飛んで行く、というようなことなら、消極的な意味では今のような社会においては、一定のケアをするためには必要なことですね。だが、全体として見ると、そのような形での情報のやりとりをして、人間の行動がコントロールされていくというのは、ある意味ではやっかいな社会であると言えますね。

エキスパート・システム

佐藤 大便や血液などを検査して、どれだけのことが分かるのかということも問題なんです。私の父が三年ほど大阪の循環器病センターに入院していたことがあり、その部長の医者といふ話してはいたんですが、決まった治療の方法はない、と言っていましたよ。その人は主治医とも意見が違ふんですが、最後は部長の権限で押し切っているみたいでしたがね。ともかく、トライ・アンド・エラー(試行錯誤)でいくしかない、と。抗生物質でも千種類くらいあるでしょう。それに第一世代、第二世代、第三世代とあり、今は第四世代が出ましたけれども、菌を取ってきて試験官で耐性試験をやるわけですね。そしてどれも効かない、となると、一番古いやつ、を打つか、となる。このように、トライ・アンド・エラーでやっている。だから、検査して何が分かるのかと思うんですね。とくに僕はエキスパート・システム(コンピュータによる専門情報分析システム)なんてね、あまり信用していません。

この前、ある大きな病院で「客観的医学は存在しうるか」というテーマで、お医者さんや看護婦さんたちに講演したのですが、アリストテレス以来の論理学の未決問題がありますね。例の「クレタ島人は皆うそつきである」と一人のクレタ島人は言った」といふエピソードのパラドックス。まあ、「佐藤はうそつきである」でもいいんですが、それならパラドックスにならずに本当になつてしまふでしょうが……(笑い)。

それからゲーデルの不完全性定理もあるし。で、結局、デカルト以来の心身二元論で言えば、菌が身体に入つたら病気になる、ということになるのですが、この頃は新たに免疫の問題が出てきてそれが必ずしも明らかでなくなつてきていますしね。たとえば、奥さんが亡くなつたら主人の方もすぐに亡くなる、という事実があるでしょう。

実際に調べて見ると、主人の免疫機能を司る白血球中の細胞は減少していないそうですね。何かその細胞が寝たふりして全然機能しないそうです。脳機能との関係も推測されているが、内容はよく分からない。今、アメ

リカの医学部で実験しているそうですが……。エイズと同じですよ、これは。エイズの場合は免疫の指揮系統を司っているT4血液リンパ球細胞というのがエイズウイルスの攻撃を受けて減少していて、それで、三十種類程の我々自身が持っている菌とかウイルスなどの、普通ならば免疫機能が働いて押さえている菌にやられてしまう。それと一緒に、奥さんが亡くなったら、主人の方が生きる意欲がなくなつて免疫機能が働かなくなるのと違うのか、と思うのです。そのように考えてくると、ムンドテラピー（言葉で治療する）、つまり、温かい言葉によって、生きる意欲を与える励ましや力づけが必要であると思いますね。

しかし、そのような、まだまだ未知の部分が残されているということからも、エキスパート・システムというのは、ごく限られた部分でしか通用しない、ということでしょうかね。

村上 それは当然そうですね。だから、エキスパート・システムは離島にいて、内科のことはよく知っているが耳鼻科のことはよく分からないような医者の方へ突然、

耳鼻科の厄介な患者が飛び込んできた時にちょっと問い合わせてみる、というような役割を果たすので、よいのではないですか。

そのことと関係するんですが、今日日本でやられている情報化についても随分、いろいろ問題があつて、仮に情報化社会なるものの現状を追認したとしても、たとえば、データベースをどのように作るか、ということに関して、戦略もなければフィロソフィー（思想）もなく、ある分野に関してとにかくデータベースを作ればよろしい、というわけで無理やりやみくもに作る、まあ、化学なら、化合物の種類があまりに多いからアイデンティファイ（同定）するだけでも、いいのかもしれませんがね。しかし、何でもデータベース化すればよい、というのは、どうも時間と金の無駄ではないか、という気がしてしょうがないんですけどね。

佐藤 まだまだ未知の部分が残されているという点でいえば、遺伝子工学も同じですね。

たとえば、細菌類やラン藻類の細胞である「原核細胞」（核膜に囲まれたところの、明らかに「核」と言える構造がな

くて遺伝子の本体であるDNAが細胞中に裸出している）における遺伝情報の発現機構は、かなり明らかになってきて

いるのに対して、「真核細胞」（細菌類、ラン藻類以外のすべての細胞で核膜に囲まれた核をもち、その多くは多細胞生物を形成する）における遺伝情報の発現機構についてはまだまだ判っていないことが多いですね。

つまり、真核細胞のDNAの中で遺伝情報として有意義な部分とその間に介在する遺伝情報として読まれない部分とが長々と続く理由が判明していないんですね。

原核細胞から真核細胞への長い進化がどのような経過を経て為されてきたかについても、いろいろ組み込み理論でやっているようですが、定かではない。とくに人間の真核細胞におけるDNAの遺伝情報は僅かに一〇％しか分かっていないらしいんですね。通産省が何千億かけ、何十年かけて解明しろ、と言うけれど簡単に解明できるかどうか分かりませんね。

村上 アメリカとフランスは今それに非常に積極的らしいですね。いくつかのボランティアの家系を選んで、徹底的にやろうとしていますね。

宗教の果たすべき役割

佐藤 ああ、そうですね。とにかく、真核細胞のことは分からないとして、癌について言えば、大体、癌ウイルスを皆持っているのではないかと。とくに、進化に関係するところが突然変異を起こすと、さまざまなプロセスを経て癌になる、ということになっているらしいですね。普通は、人間は何か、免疫機能とバランスして癌にならずに維持しているわけですね。免疫機能についての研究は最近十年位に発達してきたわけで、極端に言えばエイズになつても、発病しなければいいんでしょう。だから、エイズ患者同盟を作つて、ムンドテラピーで、互いに励ますために走り回つて、要するに「気を病まない」ようにする、ことが大切なんじゃないでしょうかね。逆に言いますとね、神経を病むと癌になりやすいのとは違うかと。

情報化社会で、まあ、キャブテンシステムはあまりはやらなかったとしても、テレビ、マイコンなどで情報中毒症になると、皆衝動人間になるらしいですね。情報の

消化率は年々低下して、昭和の戦争中は二〇・三〇％位であったのが、一九七〇年(昭和四十五年)には一一・一％、一九八五年(昭和六十年)には六％、七％位と変わっていますね。何をもって情報の消化率とするか、が問題ですけどもね。ダイレクトメールは大体捨てられている。CATV(有線テレビ)も今はあまり言わなくなつたでしょう。アメリカはとくに流行しているらしいんですが、皆ボルノ映画ですね。だから、情報が氾濫して無感動になる、と言われている。私などは無感動にならぬよう情報を捨てていますけどね。さらに活字人間から映像人間になっている。しかも、この頃、ウォークマンを聞いていますね。

私も聞いてみましたが、難聴になると言われていますね。それだけではなく、電子環境に育っていますと映像環境と同じく、やはり人間が衝動的になるんですってね。テレビとマイコンと遊んでいる。ますます妙な社会になつていく、と。そこで、カルチャーセンターのようなものがはやってくる。で、このカルチャーセンターというのは、情報社会の中で、テレビとマイコンなどの結合

らずしもそうではなくて、機械と上手に付き合う方が人間の能力としては重要であるという感じさえ出てきているわけですね。子供を見ているマイコンとなら一日中、遊んでいられる。

私の知っている学生などは、将棋がうまいんですが、友人と将棋をさしているよりは、マイコンとさしている方がはるかに気楽でいい、と言ってますね。つまり、勝った、負けた、といったような心理的葛藤など一切なくて、ただゲームを純粹に楽しめる、と。だから、ディパーソナライズド(非人格化)された相手とゲームするというのが楽しいのであって、複雑な人間関係の感情の動きや葛藤が入ってくると、うるさくてしょうがない、というわけです。そういう世代が育っていることは確かです。だから、コンパなども小さくなりましたね。

佐藤 ええ。今、騒ぐ人間がいなくていいでしょう。学生さんがおとなしくて一番騒ぐのが私くらいで(笑い)……。

村上 で、適当にモダンなビュッフェスタイルのところで一時間ほどいて、あとはごく小さなグループになつて、自分の気の合う人間とだけ飲みに行く、といった具

が盛んな中で失われた人間と人間との触れ合いを回復するためのものでしょう。

宗教をどう定義するか、ということがありますが、一般的な意味では、レ・リリジョンで、「再団結」ですね。つまり、人間と人間との再結合、ということですね。そうすると、カルチャーセンターは私は宗教の初歩形態であると思う。もつといくと、信ずる者は救われる、というところまでいきますがね。

ある意味で、宗教のような人間と人間との触れ合いを重視する環境におれば、癌になりにくいんじゃないか、と思うわけです。したがって、情報化社会が進めば進むほど、何か宗教のようなものが重要になってくるころがありますね。これは全く根拠なしに私の感じで言っているわけですが……。

村上 確かに、マン・トゥ・マンの関係よりマン・トゥ・マシンの関係の方がドミナント(優先的)になつてきていますね。子供たちも友人と付き合うよりもマイコンと付き合う。昔は様々な人間とうまく付き合えることが人間としての能力の一つであつたわけですが、今はかな

合で、それでもあまり騒ぎませんよ。

この人達がたとえば将来、何か挫折したり人間社会の中で揉まれたり、いろいろの葛藤に出会つたりした時に何を求めるか、ということですね。いわば、たくましくして行われる実験になるであろうと思うのですが、しかし、一方では、この状況になじめないお年寄りたちは何をしているかと言えば、結局、医院や病院、クリニックなどの待合室に行っているんですね(笑い)。そこで、彼らは自分の家族たちの間ですら得られなかった、人間の心と心の触れ合いややりとりのようなものを求めているとも言えます。

既成の宗教の人々には悪いんですが、私自身、既成の宗教のどこかに属しているから自分のことを言っていることにもなりますので、罪は相殺させていたたくとして、既成の大宗教なるものはそういう人達のこころの支えというか、心のやりとりというものを保証するには大きすぎて、結局、もつと小さな、社会的、制度的には宗教とは認められていないような、カリスマ的な、非常に「いい人」が一人いて、その人を中心に二十人から六十人程

度の人々が親しく集まり、そこである種の共同体ができている、というような、いわば宗教の細分化のようなことが起こっているのではないか、と思うのですがね。

佐藤 まあ、カルチャーセンターに毛のはえたような宗教、ということですね。

村上 だから本当は既成の大宗教でも、そのような役割を果たすべきであるし、果たさなければならぬはずなんだけれども、なかなかそういう人達をすくいあげられない、というところが今の宗教の中にいささか問題を投げかけているのではないか、と思います。

身体性を喪失した人間へ

佐藤 だから、この頃、本でもハウツーものが売れているらしいですね。テレホンセックスの方が本当のセックスより感ずる(笑い)というような……。

つまり、祖父母―父母―子というような直接的な社会的伝承機構がなくなったために、人間の男女が自然に直接的な触れ合いを行う方法について何も知らされていない若者達は、いざ結婚になると、どうしてよいか分から

思いました。

村上 その意味では新しい人の犯罪というのは、ハッカードだけではなく、いろんな形で出てくるでしょうね。

佐藤 自閉症的な人間とさきほど、先生の言われた小さなグループとが、共存しているような社会、それが情報社会の他の側面ということができる。

村上 『メディア・セックス』(ウィルソン・フライア・キイ著)という本が翻訳されましたね。その本は最初から最後まで、性的なインフォーメーションを我々は社会からたえず与えられ続けているというテーマなんです、与える時の手法が、サブリミナリイ(潜在的)と言いますか、意識下の情報操作を利用しているというわけなんです。たとえば、大きなポスターや写真などに、見ても分からないし、意識の上には把握されないし認識されないけれども、意識下に着実に積み重ねられるような、いわば「隠し絵」とでも言うべきさまざまな情報が隠しこまれている、と言うんですね。

これは、例のある商標の清涼飲料をおいしそうに飲んでいる一コマの写真を何分間かに一コマづつ映画の中に

なくてハウツーもの、ということになる。

こうして、ハウツーもので自閉症的な孤立した人間たちがいて、そこから少し抜がると、今おっしゃったような、小さなグループでまとまろうとする。大宗教はそこまではタッチできない、ということになる。

村上 そうですよ。いわば、人間と人間との一番濃厚な関係であるべきセックスでさえ、テレホンセックスの方がいいとか言う背後には、本当には関係を作ることができない男の子が増えているということは確かにありますね。

佐藤 この間、子供を銀行に連れて行って、カードを入れるとお金がパッと出てくるでしょう。それを数えるんですが、子供はお金が銀行から出てきたと思うし、あれじゃ、完全に金銭感覚がなくなりますね。親父が一生懸命に働いて得たお金であることが分からなくなりますね。子供によくないことを教えちゃった、と反省しましたよ(笑い)。

また、ファミコンにアダプターを付けると株取引ができるでしょう。あれもやはり怖いからやめておこう、と

入れておくと、映画の観賞者は意識上では何も分からないけれども、何かを飲もうと思った時には必ずその商標のものに手を出す、というようになる、というのと同じですが……。あの広告法は禁止されましたが、しかし、現実には現在の社会の中では広告の技法としてはそのような類の手法が非常に多く使われている、ということ暴露した本なんです。

たとえ意識下までいかなくとも、たえず同じ情報をたたき込まれていけば、条件反射的になりますしね。

人間というのは、プラスチックなものだから、どういう形に塑型していくか、ということの流れ続ける情報というのはやはり、ナチス・ドイツのゲッペルスではないが、現在のテレビなりラジオなどには、相当大きな効果を持っているでしょうね。

佐藤 さきほど出ました、廣松さんなんかの「もの」。「こと」の、「こと」つまり、関係性ですね、これを情報ということにしますと、情報が全てになってしまつて、結局、脳細胞だけが肥大化していくことになる。そうすると、身体性の喪失、ということになってSF的人間に

ならないか、と危惧するんですが……。もともと、廣松さんはそのような意味でおっしゃっているとは思いますが、あえて通俗的に理解した場合の話ですが……。

村上 確かに、そういう意味でいうと、コンピューターだけを付けた人間みたいなものです。

佐藤 昔なら、たとえば、拳なら拳を拡大して機械を作ったわけですね。ハンマーなどのように。動力機、伝達機構、作業機を備えて、人間から自立したものがかつての機械であつたわけです。

だが、かつての機械は判断能力も制御能力も持っていなかったで、その操作は人間にゆだねられねばならなかったのですが、コンピューターの出現と情報理論の発達によって、それぞれコンピューターにつないで動かしていくようになり、しかもそのコンピューターの部分が拡大していく。オフィスオートメーション(情報機器、通信機器による事務の自動制御化)もファクトリーオートメーション(工場の自動制御、機械化)も進み、いまだホームオートメーション(オフィスオートメーションの家庭版)までは至っていませんが、そういう形で進んでいきますと、そ

のコンピューターだけが重視されていって、人間までその影響を受ける結果、身体は鍛えなくなるし、身体性の希薄化した存在になっていく。

村上 ただ、私もそう思うのですが、一般論としては明らかにホームオートメーションでもそんなに普及しないと思うんです。というのは、近代化の一つの特徴は、人間の能力や機能の一部を何らかの形で外部のシステムや制度にあずけてしまふところにある、と言えるのではないか、と思うのです。いい例が、現在の安全システムですね。本来は自らが守るべき「安全」を何か外の制度や機構にゆだねてしまふでしょう。

また、わが家では焚き火も条例かなんかでできない、自分の家を出た落葉でさえ、自分で処理することができないんです。社会が用意してくれているゴミ処理という制度に依存しなければいけない。教育でも、社会で用意してくれる教育システムの中にあずけないと我々は自分だけで教育できないですね。聞くところによると、いくらかの罰金を払うと、小学校へ自分の子供を行かせないですますことができる場所があるんですってね。

というわけで、自分の能力をどんな外のシステム、制度に委託していくことが進歩であると思ってきたところがあるんですね。それは基本的には人間としてはあまり好ましいことではない、という点では先生にまったく賛成なんです、INSやVANにもすごく熱心だった人がいるんですね。耳の悪い人が電話を聞く時に、あのシステムを利用したり、第三者が割り込める電話ができればいいとか、つまり、人間が持っていることが期待されている機能の内の、一部が失われた人達が、何とかして、先生のおっしゃった拳の変わりにハンマーを使うのと同じような意味で、情報処理的な機能をそのようなシステムに期待しようとしたところは認めておいてよいと思っているのです。

真面目にいろんな委員会が一番いい意見を出していたのはそのような人達でした。だから、あのVANがもう少し別の形で実現した時に、そういう側面がうまく助けられれば、今後の高齢化社会における運動機能と同時に情報処理機能をも上手に活用できる、いわば目玉になる、と思うんですがね。情報処理機能で、高齢化社会の中で

補うべきものは補えるという可能性には、期待できると僕は思います。

佐藤 コンピューターは脳の外延的延長ですね。決して脳にとつて代わるものではありません。意欲もないしね。だからそれを援用した時に、先生が今おっしゃったろうあ者とかいろんな人はそれを拡大できる、ということとで意義を見出すことはあり得ると思いますよ。しかし、普通の人にとつてはどうですかね。僕は第五世代コンピューターというのは、あれはうそや、と思うているんですがね。人間のように思考する、なんてなことは原理的にできない、ということははっきりしているんですがね。ロボットというのは、五〇キのロボットで三〇位しか持てませんね。力学的になっていきますから。

僕らはやはり五〇キで五〇キをかついだり、場合によつては一〇〇キ位かつぐのがありますからね。全身レベルで自動制御しているでしょう。だから違うんですね。でも、知能の欠落した人が脳機能の拡大ができる、という意味ではそこに意義を見出すことができますがね。我々は単に脳機能だけではなしに、全身レベルで自動制御や

っています。つまり、細胞レベルで皆、自動制御していますからね。その身体性を忘れて、脳レベルの問題だけになってしまおうとまずいのではないでしょうか。

電気・電子的な方法への過信

村上 確かにあまりにも中枢だけが拡大するというのはおかしいですね。私最近、ちよっと感じるんですが、我々は少し電子的、あるいは電氣的な方法にたよりすぎていませんか。

もう少し、単純なメカニカルな、機械工学的な側面で利用できるものはまだまだあるんじゃないか、と思っているんですがどうなのでしょう。

佐藤 いや、前と逆の方向に行っているのと違いますか。昔、松下電気などではね、機械の学生が行くことがなかったんですわ。最近では五人でも十人でも欲しい、と言うんですね。と言うのはね、金具がこわれるんですね、結局は。電子の部分は要するにマックスウェルの電磁方程式が神の言葉で書かれたと言われるほど、見事なもので、あれによって回路網を組めば間違いないにできる、

みたいな雰囲気も出てきていますが、これも困りますね。大体、一カ月や二カ月、外国に行ってきたからといって、簡単に異文化を理解できるもんやない、と思うんですね。

村上 確かに情報化ということで、さまざまな我々がこれまで聞いたこともないような、あるいは一生かかっても行けそうもないような地球の隅々の別の世界から映像を拾い出してきては我々に伝えてくれるわけだけれど、よく言われることなんですが、いわば擬似体験であって、今先生が言われたように異文化を理解したことにとうていならない、わけでしょう。

そりゃ、見ないよりはよいかもしれない、けれど、さきほどの身体性の話とも関わってくるのですが、どこかで格闘がないと我々はどうしても理解したり分かったことにはならないのに、擬似体験がいつの間にか、本物の体験とすり代わっているところ、人間に対して用意しているチャンネルとしては問題を含んでいますね。

佐藤 最近、中国で天安門事件が起きましたね。学

だから、その電子の部分はもう進歩の余地がないんですね。

あとはウェアハウスをきれいに作ったり、ICをどうするかとか、つまり、表面処理をどうするか、という問題でしょう。そうするとメカの部分や溶接の部分がこわれることが多いものですから、機械屋が割に重要視されるんですよ。

村上 ああ、なるほど。逆なんですな。

佐藤 それと機械工学は大体経験からできた学問なんですな。化学と電気、電子というのはサイエンスからきた天下りの学問なんですよ。そのところ、天下りの学問はもう動きようがない。もともと、電気が光に最近では代わっているという進歩はありますがね。光の方がスピードが速いんですから。本質的にはそのような進歩はありますが、後はどうしても光ファイバーが折れたり曲がったりするから、そこを何とかする必要がある出てくる。

話は変わりますが、最近、むやみに「国際化」という言葉によってテレビでも雑誌でも盛んにその種の情報を一方的に流すことによって、何か外国に行かないとダメ、

生たちや知識人の自由化要求を、ああいう形で弾圧したことは絶対いけませんね。しかし、一方で言えば、学生や知識人の自由化というのが「人間の自由」にまつわる全体的な状況をふまえて主張しているのかどうかを考えた時には、彼らは少し甘過ぎるのではないか、という気もするんですね。単なる今の日本のような資本主義的自由化がよい、というだけではね。

日本は世界的に見れば特殊社会なんですよ。この特殊な日本社会の情報がどんどん中国に入って行って、その結果、学生たちや知識人の自由化要求となったと思うのですが、彼らの「自由化」と言うのが、そう簡単に歴史的に達成できるものかどうか、と言うのは非常に問題なんですな。

村上 ソビエトのグラスノスチ(情報公開)が、どうして起こったのかといえば、全世界に張り巡らされたマスメディアの発達によるところが大きいわけでしょう。たとえば、チェルノブイリの事故だって隠しておきたかったんでしょ、メディアの力によって認めざるを得なかったわけですし、情報公開の方向にソビエトの国を少

しづつ開かせているんですね。

中国にしたって、全くテレビやラジオがなくていわば、情報鎖国状態に置いておくことができれば、ああいうことにはならなかったわけですし、また、情報的鎖国状態を外から無理やり開かせることも悪いとは言えないんでしょうけれども、さきの日本人の国際化問題とは逆の意味で、日本のテレビが日本の状況を中国に伝達した時に、中国の人民にとってはあくまで、擬似体験に過ぎないのにそれが理想化されるということがあれば、これは不幸なことですね。

佐藤 だから、中国の指導者は間違ったことをやったと思うのですよ。経済を開放するために、徹底的に自由化するということは、種々の情報が入ってくることでですね。その当然の結果として、学生たちが自由化を唱える、これを弾圧するわけですから。情報を徐々に開いていくことができればよかったんでしょうけれどもね。

村上 日本の維新の頃のように、徐々の情報の開放ということができればまだそれの方がよかったと思うのです。つまり、自前の教育で少しづつある種の情報を取り

込んでいく、というようなことができればよかったんでしょうが、しかも、自由化、近代化とか、というのはいろんな人がいろんな解釈を述べて多様なためになおさら混乱していることがある。

だから、イランのような文化的鎖国状態を、現在のよきな世界的な情報化時代に作り出すことができることの驚きというか、何故に作り出すことができるのかということなんですがね。

佐藤 五、六年前、ホメイニ師の特使が京都に来たんですよ。僕が受皿になって世話をすることになったんです。

京大の洛友会館に、京大名譽教授の出口勇藏さんや平田清明さん(当時、京大経済学部長など五、六十名来てもらって、交流会を催したんですが、一番、偉そうにしているのが、ホメイニの特使で、次に偉そうにしているのが、神学生の学生なんです。一番横で小さくなっているのが革命防衛隊のような服を着た中年でした。

初めにお茶を出したんですが、全く飲まないんですね。東京から付いてきたイスラム教徒の日本人に聞いてみた

ら、イスラム教徒の入れないお茶を飲んだら不浄だ、と言うわけです(笑い)。さらに、洛友会館には食堂がありますが、そこで食事もしないんですね。自分が持つてきた缶詰を食べるんですわ。イスラム式の食事をさせるところは東京に一軒あるんですってね。京都にはないから食べないんですね。

村上 あれは何か然るべき儀礼をほどこした肉でないと食べられないんでしょう。

聖と俗をめぐって

佐藤 そうそう。で、出口勇藏さんがイスラム経済に関する良い著作を英語でも何語でもいいから一つ教えてくれと聞いたら、千三百年前のコーランの語録集があります(笑い)、と答えた。平田清明さんがイランには資本家がいいますか、と聞いたら、います、と。では、搾取はありますか、と聞いたら、いや、資本家はいますが搾取はありません、と答えよった。これには平田さんもキョトンとしてしまつて、明くる日の朝日新聞には「珍問答」と紹介してあった(笑い)。

次に自己紹介してもらった時、一番横で小さくなっていた中年というのが実は、イラン外務省国際局長で官僚としては一番偉いんでびっくりしたんです。で、ある京大に來ているイスラムの人が日本人と結婚したんですね。その特使から「イスラム教の方式にのっとって結婚したか」と聞かれて「否」と答えたら、「それは死刑に値する」と言われていました(笑い)。

だから、政教分離というのはほんの近代の概念でしかないんですね。政(俗)教(聖)分離が本当に正しいかどうかということも一つの大きな問題点ですよ。例のビューリタンが俗に近づいたら汚れる、と言うわけで聖域に行つてしまつて、その結果、俗が力を持つてしまい、俗の最高たる金が万能になってしまったのが現代ということでしょう。

村上 逆に言えば、これほどの国際的情報化社会だからこそイランがファンダメンタリズムという形で何とかして自分たちの宗教を守ろうとして防衛的な態度にならざるを得ないところがあるのではないのでしょうか。もう少しリジ○ナリズムが自然の形で保証されているような

国際社会であつたら多分、あんなに頑なになる必要はなくてすむと思うのですがね。

佐藤 政(俗)教(聖)分離というのは、神の座を貨幣と科学技術が占めたということでしょう。その聖俗分離の徹底したものが情報化社会ということになると、自閉症の人間ができ上がってね。人間自身の破壊になつてしまふでしょう。だから、もう一度、政教が一致して何故悪いのか、と居直つてみたくもなりますがね。

村上 でも、近代化という概念の中に、聖俗分離がどうしても入つていたというのが歴史的な過程であつたわけですから、これはやむを得ないところがありますね。ただ、一つだけ、僕が政教分離が望ましいといえる側面があるとすれば、聖と俗とが一致していても一向に構わないが、ただ、ある一つの聖だけが唯一の俗との結びつきである、という前提が多分困るんだと。やはり、死刑になるのは困りますからね(笑)。

佐藤 つまり、政教分離を優先した上で、もう一度、聖俗の一致の仕方を考え直す必要があるということですね。

た社会を作ろうとしているのか、というメッセージが日本の文化から伝わってこない、ということに苛立っているんじゃないですか。

外国は日本から俗のところのものをだけを怒涛のように輸入させられていて、ものを買うのも構わないけれども、日本人はどういう価値をこの地球上に実現したら満足するのか、ということについてのメッセージが伝わってこない、と感じているんじゃないか。

それは一面から言えば、さつき先生がおっしゃったように、日本は特殊な社会でいわば、世界史の中で初めて、聖と俗とを完全に分離して、俗のものを掲げて国際社会に打って出ているんで、それは世界史の中で初めてなのです。他の国々はどこかで聖と結びつきながら、やってきた。つまり、ユダヤ教、キリスト教やイスラム教などと結びついている。中国はどうか分かりませんが、中国は現在のところ覇者とは言えませんがね。

だから逆に、日本の社会はどんな聖とでも結合できるように、俗だけを繁栄させておけば、あとはどこかの聖と自由に結びついてください、でいいんだ、という説も

村上 ある意味では否応なく情報化社会というのは、そういう方向へ行かざるを得ないかもしれませんね。

佐藤 まあ、デカルトの心身二元論が政教分離へと行き着いたわけですからね。だから、さきほどから言っていますように、情報化社会が進んで、ますます脳細胞の機能の拡大した時にはデカルトの二元論ではもはややっていけないし、超えざるをえないですね。

政教一致の話ですが、キリスト教の場合はかなり非寛容であるのに対して、仏教はわりあい寛容だから、そんなに怖くないのと違いますかね。さきのイスラム教の場合は、ユダヤ・キリスト教の姉妹宗教ですからね。イスラム教もやはり、開発志向性と非寛容さを持つていて、少し商業化されているところだけが違う、ということでしょう。シーア派はとくにきついですけどね。だから、東洋哲学に代表されるように、宗教が寛容な場合には政教が一致しても少しも怖くない、と思うんですがね。

村上 むしろその方が望ましいのかもしれないですね。今の国際摩擦の背景にある一つの側面として、これもまさに情報なんですが、日本がどういう聖と俗との一致し

ありますがね。だが、それで話が済むのかとも思いますか……。

佐藤 だけど、かつてのような、国家神道との結合は怖いですね。徳川時代までは、天皇家の葬式も全部仏教が行ったんですね。明治維新というのは、国学者がやったんですね。彼らが吉田神道と復古神道との二つをまとめて国家神道を作ったのです。その国家神道によって、仏教は排仏毀釈されたんですからね。

村上 日本の社会の場合は聖なる価値にファナティック(狂信的)になるところは一向一揆などの例外を除いて全体的には無かったのではないですか。明治維新以後の日本の伝統の中で持った国家神道というのがいささか、聖の価値にファナティックになる役目を果たしたことは確かですがね。その経験から、聖なる価値へと傾斜するファナティズムに対する危惧の念というのは我々の中にありますね。

そういう意味で、人間の心を良きにつけ悪しきにつけ、かきたてるものとしては、宗教を含めて何かのある俗を超えたものというのは力が強いんですね。その点で、情報

操作がなされると、怖いわけです。

佐藤 キリスト教にしろ国家神道にしろ超越でしょう。絶対者ですね。仏教は本質的には無神論で空だから、そういう点では怖くないんですよ。

村上 キリスト、イスラム教というのはアブソリュートイズム(絶対主義)ですからね。

佐藤 今の科学技術というのは、キリスト教から出ているでしょう。あれを何とかつぶしたろ、と思うたんですけどなかなかつぶれませんね(笑い)。

ニュートン力学にしろ、電磁気学にしろ、量子力学にしろ、場の量子論にしろ、全部ハミルトニアンで、最小作用の原理で、「神は無駄をしない」となるでしょう。局所場にしても次々にハミルトニアンを作って、あれと対決をしたろと思うたんですがね、大統一理論を作るより難しいですね。

村上 それは新しい科学ですね。まさにニューサイエンスですよ(笑い)。

(むらかみ よういちろう・東京大学教授)

(さとう すすむ・京都大学教授)